

サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (6)

二〇一五年七月二十八日付で、日本統一教会（現、家庭連合）元会長の江利川安榮氏が「退会届」を郵送してきました。そこには、文亨進様を中心とした米国のサンクチュアリ教会の下で、日本サンクチュアリ教会総会長兼協会長として出発するとありました。

サンクチュアリ教会は、真のお父様のみ言と伝統が真のお母様によって覆されていると主張し、お母様のなさることをことごとく否定しています。これらの主張は、お父様がお母様と共に立ててこられた勝利圏を否定するものであり、真の父母様を中心とする統一家の一体化を損ねるものです。以下、サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤りを指摘します。

なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。（教会成長研究院）

注・本文中、真の父母様のみ言は「青色」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色」で色分けしています。

【9】 八大教材・教本『天聖經』を改竄したという批判について

文亨進様は、二〇一五年七月十九日の説教で「お母様の指導のもと、『天聖經』は八〇パーセント変えられた」と語り、『天聖經』を改竄したと批判しておられます。

しかし、この批判は事実

に反して、真のお父様は次のように語っておられます。

「先生が語ったことを整理して逝かねばなりません。それゆえ、『天聖經』を中心としたものをつくったのです。（八大教材・教本『天聖經』は）今まで出版した先生の説教集四百八十卷の中から抜き出した言葉です。その三倍が、まだ発表されていない『天聖經』二巻、あるいは三巻となりえるものが待っています」（二〇〇八年九月二十五日）

このみ言に見るように、真のお父様の編纂されていないみ言を『天聖經』二巻、三巻として後世へ残していかなければなりません。真のお母様はこのお父様の願いに従って、お父様がみ

言を編纂されたものであり、み言の改竄などしていません。

また、天一国経典『天聖經』は八大教材・教本を生命視しています。その一四四九ページには、八大教材・教本について「獄苦を経ながらも……準備した遺言書です。永遠の人類の教材、教本として……皆様が霊界に入っても読んでも読み、学ばなければならぬ本です」と語られたみ言が収録されています。このみ言が収録されている理由は八大教材・教本を重要視しているからです。

もし、八大教材・教本『天聖經』を軽んじて改竄する意図があれば、八大教材・教本を回収し廃棄したでしょう。しかしそれは廃棄されず、今もそのみ言がさまざまな出版物に引用されています。八大教材・教本が改竄された事実はありません。

また、八大教材・教本『天聖經』には二〇〇〇年以降のみ言がほとんど収録されていません

おかたは、お母様以外におられません。

【10】 「聖婚問答」を変えたという批判について

文亨進様は、「お母様の指導のもと……聖婚問答も変えられた」と語り、真のお母様を批判しておられます。

この問題について応答いたします。以前の「聖婚問答」は次のようになっています。

「一、あなたがたは、神様の創造理想を完成する成熟した善男善女として、永遠なる夫婦の因縁を結ぶことを神様と真の父母様の前に約束しますか。

二、あなたがたは、真の夫婦となり、今後子女たちをみ言にかなうように養育し、統一全家と人類と神様の前に必要とされる指導者を養成することを約束しますか。

三、あなたがたは、真の父母様を中心として、統一家の伝統

でした。真のお父様の聖和後、真のお母様は二〇〇〇年以降のみ言を含めた生涯全体のみ言を整理していかれました。そのようにして「八大教材・教本」以外のみ言を集めることで、分派が「み言集」を作成してかかって公表し、分裂と混乱を引き起こすことを未然に防ぐことになったのです。実際に、真のお父様の聖和後、「み言集を出す」と準備していた霊的集団があります。

ところで、真のお父様は「先生が生涯全体の結実として宣布したみ言、それが『天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会』です」（二〇一一年二月三日）と語られましたが、この結実のみ言は八大教材・教本『天聖經』に含まれていませんでした。このみ言が天一国経典に収録されたのは、未来永劫にみ言の伝統を残していくためです。

また、天一国時代に関する重要なみ言である「基元節」「天を受け継ぎ、後代の統一家の後孫たちと人類の前に誇り得る伝統を伝授することを約束しますか。

四、あなたがたは、創造理想を中心として、神様と真の父母様のみ言を受け継ぎ、神様の四大心情圏と三大王権の伝統を確立し、神様と真の父母様とともに世界の人々を愛し、地上天国建設と天上天国建設の基本となる理想的家庭を形成することを約束しますか」

上記の内容が、現在では次のようになっています。

「あなたがたは、天の父母様の創造理想を完成する善男善女として、永遠なる夫婦の因縁を結び、天地人真の父母様が立てられた伝統を受け継ぎ、天一国が目指す理想家庭を完成することを約束しますか」

両者を比較すると、四つの内容が、簡潔に一つにまとめられたのが分かります。すなわち、一の「成熟した善

男善女として永遠なる夫婦の因縁を結ぶ」が、「天の父母様の創造理想を完成する善男善女として永遠なる夫婦の因縁を結び」に。二の「子女たちを……神様の前に必要とされる指導者として養成」が、「(子女を教育し)天一国が目指す理想家庭を完成する」に。三の「真の父母様を中心として統一家の伝統を受け継ぎ」が、「天地人真の父母様が立てられた伝統を受け継ぎ」に。四の「地上天国建設と天上天国建設の基本となる理想的家庭を形成」が、「天一国が目指す理想家庭を完成する」に、それぞれ対応しており、簡潔にまとめられています。

しかも、聖婚問答が「統一家」という特定の人々に限らず、全人類に適応される内容となっています。こう見ていくと、現在の聖婚問答は、基元節を迎え、天地人真の父母様の時代的勝利圏に従って変化したものであり、万民が人種、民族、文化の壁を

越えて理解し、天一国完成後においても永遠に誓いうる、より普遍的な「宣誓文」になっていることが分かります。

文亨進様は、「お母様の指導のもと……(神様を『天の父母様』と呼び)一神教を二元論に変えた」と述べ、真のお母様を批判しておられます。

この問題について応答いたします。真のお父様は二〇一〇年一月一日午前零時の祈禱において、「愛する天の父母様。地上に相対的立場に立った地上の父母様を一体化させて天正宮博物館を建て、天の内外のあらゆる苦痛の道、嘆息の道を除去させるために」と祈っておられます。すなわち「天の父母様」とは、真のお父様ご自身が、唯一なる神<sup>カミ</sup>に対して用いておられる

た呼び名であり、しかも一つの概念です。父と母とを分離させ、二つに分けて語っておられるのではありません。

ところで、真のお父様は人間の成長過程と、人生の目標について次のように語っておられます。

「幼児が成長したのちに結婚をするということ、これは、夫婦の位置を尋ね求めていくことであり、父母の位置を尋ね求めていくことです。神様と一体になる位置を尋ね求めていく道です」(八大教材・教本『天聖經』二二三六ページ)

この人間の成長が、神様とどう関係しているのかを理解しなければなりません。真のお父様は次のように語っておられます。

(同、一五九〇ページ)

「神様も赤ん坊のような時があり、兄弟のような時があり、夫婦のような時があり、父母のような時があったので、(人間を)そのように創造されたのです」(同、一五九一ページ)

従来の神学では、神様を「永遠不変」の絶対者としてのみ捉え、「神の成長」という概念を知りませんでした。しかし、「わたしと父とは一つ」(ヨハネ一〇・30)と語られたイエス様は、聖書を見れば分かるように、幼児期、少年期、青年期、成人期と成長していかれました。

「神様と一体になる位置を尋ね求めていく道」が人生であるなら、神様とイエス様の願いは、さらに結婚をし、人類の「真の父母」になることであったと言わざるをえません。真のお父様は、アダムとエバの結婚式は「神様の結婚式」でもあったと

語っておられます。

「横的な父母であるアダム・エバは神様の体であり、縦的な父母であられる神様が心なので……ここで心と体が一つになって愛するとき、アダム・エバの結婚式は、体的な父母の結婚式であると同時に、心的な神様の結婚式になるのです」(『ファミリー』一九九九年一月号、二二ページ)

「アダムとエバが真の愛で完成することは、まさに神様が実体を身にまとう願いが成就するのです。……アダムとエバが善なる子女をもって真の父母になることは、まさに神様が永存の父母の位を実体的に確定(することです)」(『祝福家庭と理想天国』(I)二九ページ)

ここにおいて、「神様が永存の父母の位を実体的に確定」と語っておられるように、神様の願いは「天の父母様」になることでした。

二〇一三年の基元節を機に、神様の呼び名が「天の父母様」になりましたが、それは、真の父母様が「最終一体」を成し遂げ、摂理の「完成、完結、完了」を宣布する勝利圏を立てておられたがゆえに可能だったのです。

真のお父様は、これまで、神様を「囹圄の神」「鼓子の神」と語っておられました。神様は解放され、さらには人類子女たちに対する真の父母としての責任を果たされることになって、ついに「天の父母様」となられたのです。

また、真のお父様は、神様の血統の出発について次のように語っておられます。

「アダムとエバが神様を中心とした真の愛の夫婦となれば、神様は理想どおりに、ご自身の実体であるアダムの体の中にいましたまいながら、エバを愛さ

れるようになるのです。さらには、アダムとエバは神様の実体をまとった真の父母となつて、善なる愛、善なる生命、善なる血統の出発となったことでしょう」(同、三一―三二ページ)

み言に「四大心情圏と三大王権を完成した家庭が、理想的な家庭」(八大教材・教本『天聖經』二三四四ページ)とあるように、三大王権(三代圏)の完成が理想家庭であるならば、それは、男女が結婚して夫婦となり、子女ができて父母となり、さらにその子女が結婚して孫が生まれ、祖父母となり、その孫の結婚までを含め、真の家庭の「三代圏の完成」を指します。

しかし、『原理講論』に「イエスと聖霊とは、神を中心とする霊的な三位一体をつくることによつて、霊的眞の父母の使命を果たしただけで終わった」(二六八ページ)とあるように、イエス様は「個人路程」を歩まれ

ましたが、結婚できなかつたため、「家庭路程」を歩むことはできませんでした。

それゆえ、真の父母様が歩まれた一九六〇年天曆三月十六日の「聖婚式」から二〇一三年天曆一月十三日の「基元節」までの神様の摂理は、真の父母様が「真の父母」として成長し、完成していかれる「家庭路程」、ひいては「宇宙的路程」であったと捉えることができます。同時にそれは、神様が「天の父母様」になられる成長過程であったと言えるのです。

「基元節」は、神様の結婚式を祝賀し、天一国を実体的に出版する起点となる日です(天一国経典『天聖經』一三七四ページ)。したがって「基元節」を機に、神様を「天の父母様」と呼ぶようになったのは、神様が長い歴史において切望してこられた「父母になりたい」という切なる願いがかなつたことを意味するのです。